

## **一次原稿は7月末に完了を！**

各編集委員の皆様には、執筆活動お世話をかけております。ラストスパートをかけておられることと存じます。お忙しいとは思いますが、「忙しいときほど仕事は進む」は前田和男先生（前監修）の言葉です。その意をお汲み取りいただき、何卒執筆をよろしくお願いいたします。（市史編さん室）

## **－市史編さんのブレイクタイム(29)－**

### **カツオ節から宗田節への転換** 市史編さん室 田村公利

#### **(1)はじめに**

近世から紀州印南海民が鼻前七浦を据浦として足摺岬や臼落沖合でカツオ漁が展開され、地元民を巻き込みながら納屋で節加工を行い、江戸や大阪に上質のカツオ節を海上輸送した。傷節は下関に、煮滓は日向に荷揚げした。このように足摺半島南西部は、黒潮が接岸し、地形上の好漁場であることを生かしてカツオ節加工を連綿と営んできた歴史がある。

近代の動力船導入以降、地先で待つカツオ漁から、カツオを求めて追う遠洋漁業にその形態が変化した。一口にカツオといってもおおまかに「カツオ」「スマカツオ」「マルソウダカツオ」「ヒラソウダカツオ」4種類ある。それぞれに特徴があり、生食が適しているもの、節加工に適しているもの、両方可能なものなどがある。

#### **(2)宗田節生産が始まったのはいつ頃か**

昭和30年代、高知新聞記事を散見すると、足摺岬沖合に県下の各漁港から漁船100隻余りが出漁し、メジカ（ソウダカツオ）漁を行っている①。昭和30年代の記事を整理すると、ソウダカツオの漁獲量は、昭和30年度・650トン弱、昭和31年度・510トン、昭和33年度・370トン弱、昭和34年度・1500トンとなっている。特に、昭和34年度はソウダカツオ全国漁獲量1875トンのうち、8割の1500トンのソウダカツオが土佐清水市各漁港で水揚げした合計である。

このような近海で大量に水揚げされるソウダカツオを原材料に、宗田節の加工が盛んになり、今日につながっていると思われる。高知新聞記事を整理していると、昭和30年代から徐々にカツオ節から宗田節加工にシフトされてきたのではないかと推測する。昭和35年3月27日の高知新聞記事によると、土佐清水市内で節加工業者は43事業所ある。また、この記事に市内節納屋の経営診断を中小企業庁大下登録診断員と高知県企業能率相談所吉松次長が行ったことが記載されている。当時の土佐清水市内の節納屋では、1・2・3・4・11月に宗田節を加工し、4・5・6月はカツオ節、3・7・

8・12月は赤字月となっていた。カツオやソウダカツオの漁獲は自然相手であり、年間の安定した収入には至らなかったのであろう。診断所見の最後に「企業の盛衰は、自然資源にあるので調査と保護対策を講ずべき」と結ばれている。

### **(3) 曳き縄で行われるメジカ(ソウダカツオ)漁**

ソウダカツオ漁は曳き縄漁で行われる。冷凍のイワシ、シラス、イカナゴ、アミ類を撒き餌に使い、集ってきたソウダカツオをカブラ(飾りを付けた針の仕掛け)で次々と釣り上げる。(2)で記載した経営診断から60年余り。ここ5・6年前頃から最盛時の10分の1程度に水揚げが落ち込み、地場産業の宗田節加工に影を落とす。60年前の心配が奇しくも的中した形となった。

その要因を探ればきりが無い。水温や黒潮の離岸、漁業従事者の高齢化、燃油の高騰等々、ソウダカツオの水揚げ量の減少理由は、いくらでも挙げる事ができる②。

### **(4) 宗田節産出を持続可能な取り組みに**

平成8年(1996)10月2日、老朽化による建て替えでフィッシュミール工場が竣工した。納屋で取り除かれるソウダカツオの骨や内臓を加工し、肥料や鶏の餌として利用する。魚油は燃料として利用され、まさに捨てる所がない。延床641㎡、1時間で3トンの原料処理ができる総工費3億4000万円の施設が完成した。以前は風向きにより魚の腐臭が周辺に漂っていたが、新施設によりこれが随分と抑えられるようになった。

平成5年8月、土佐清水市と地域の金融機関が資本金5000万円を出資し、土佐清水市の第3セクター「土佐食株式会社」を設立した。この会社は、三崎地区に置かれ、ソウダカツオを加工し、付加価値を付け商品「姫かつお」のスティック(真空パック)やペットフードが製造された。平成20年12月、「株式会社土佐清水元気プロジェクト」、平成28年11月、株式会社土佐清水ホールディングスが設立された。令和元年10月1日よりこれらの「土佐清水ホールディングス」「土佐食株式会社」「株式会社元気プロジェクト」の3社が合併し、「土佐清水食品株式会社」が新たに誕生した。基本となるのは、土佐清水市で水揚げされたソウダカツオ等の地元の各種産物を利用し、地産地消と就労確保のための会社である。自然環境との調和と持続可能な産業活動は、本市の永久の課題である。

#### 引用・参考文献

- ・『高知新聞』昭和31・9・8
- ・『高知新聞』昭和33・2・8
- ・『高知新聞』昭和34・4・21
- ・『高知新聞』昭和34・10・28
- ・『高知新聞』昭和35・3・27
- ・問可柁善「浜の活力再生プラン」高知地区地域水産業再生委員会清水部会、2014年

註

①『高知新聞』昭和34・10・28

②問可柁善「浜の活力再生プラン」高知地区地域水産業再生委員会清水部会、2014年。